

知られざる 横浜の歴史

浜銀総研 本城 直樹氏(19期)

私たち卒業生が青春時代を過ごした横浜。今では、人口370万人を超える日本最大の政令指定都市(日本人100人のうち3人が横浜市民!)は元々、たった101戸の寒村「横浜村」だった。

その知られざる歴史を、浜銀総合研究所・本城直樹氏(19期)にひも解いていただく。

横浜村とは、現在のどう?

開港当時の横浜村は、現在の元町・中華街駅付近を付け根とし、馬車道駅付近まで本町通り(地下をみならみ線が走る)を背骨とする半島状の地域でした。

関内と関外

横浜市は「関内」(江戸幕府は開港に当たり、長崎の「出島」をイメージしました。江戸に影響を及ぼさないよう、周囲を川で囲み、橋を渡らなければ他の土地に行けないようにした)と「関外」(「関」を設けた現在の横浜市内でも、宿

日本で最も歴史の長い銀行(Bank)の誕生

1869(明治2)年、横浜為替会社が設立されました。「為替会社」という単語が充てられた前の「Bank」の訳語です。

西部劇の舞台? 開港当初の横浜

横浜の歴史について、分かったつもりになっている、知っていないで知らないことが少なくないように思います。

たとえば、「伊勢佐木町を関内と呼ぶのは本当は正しくない」ということは、知っていない損はないと思えます。横浜の偉大な美業家・原富太郎(三溪)が世界遺産・富岡製糸場を所有・経営していたことなども、戸数101戸の寒村・横浜村が、開港によって歴史の表舞台にのびに登場し、一攫千金を夢見て全国から商人が殺到した。そこにはごく一部の成功者と多数の失敗者が、突然誕生した活気あふれる西部劇の舞台。それが開港当初の横浜だったと思えます。



本城直樹氏(19期)の略歴
横浜生まれ。1986年横浜銀行に入行。2009年より同行創立90周年に向けた記念誌作成、展示室設置などを担当。2011年、浜銀総合研究所に出向。現在は同研究所の機関誌「ベストパートナー」の編集人も兼任。趣味はフルマラソン(ベストタイムは3時間55分)。

我が国の銀行のはじまりとされ、全国に8か所設立されました。他の7か所はすぐに解散しましたが、横浜為替会社は、開港間もない横浜に不可欠な金融機関となりました。その後、第二国立銀行に組織変更し、第二銀行を経て、1928(昭和3)年、「横浜興信銀行」(のちに横浜銀行に行名変更)が受け継いでいます。単に1企業の歴史にとどまらず、地域の歴史を後世に伝えるものとして、2010(平成22)年、みずほ銀行横浜支店前の歩道に、「横浜為替会社」の記念碑を建立しました。

セーリングヨットで世界一周

須藤 尊史(3期)



筆者(パナマ運河にて)



ハーモニー-VI号

少し前のことですが、定年退職後の2008年12月、タイのプーケットからセーリングヨットで西回り世界一周に出航し、4年後2012年11月末プーケットに帰港しました。ヨットの名前は「ハーモニー-VI」、乗組員は同年代の男3人、艇は50フィートFRP製。

2008年12月プーケット出港西へ。インド洋のモルジブ→インド西岸→オマーン→イエメン→エジプト紅海沿岸→スエズ運河を抜けトルコへ。シリア→ヨルダン→イスラエルを回りギリシャへ。エーゲ海の島々を回り、2009年末トルコへ戻り、ヨットを上陸して日本へ一時帰国。2010年、

地中海の国々→ジブラルタル→大西洋横断。2011年、カリブ海の島々を反時計回り→パナマ運河→太平洋。ガラパゴス→南太平洋の島々を巡りフィジー。2012年、パプアニューギニア→ダーウィン、インドネシアを横断し11月プーケットへ帰港した。

世界一周する中で、様々な民族(人々)、宗教、言語に遭遇。世界遺産、遺跡、絶景、博物館等も観光、多くの「目から鱗」を体験した。例えば、ほとんどの国ではイスラム、キリスト、ヒンドゥー、その他宗教にせよ、生活のかなりの時間を宗教活動に割いていた。また、訪れたほぼ全ての国で、むしろ新興国ほど天文学的貧富の格差を目の当たりにした。航海中は、船尾から釣針を流し様々な魚が釣れ、鮪やエイの群にも遭遇した。自然現象(?)では、インドネシアを横断中の真夜中、一面ミルクを流したような不思議な白い海を3時間程航海した。あれは一体何だったのだろうか。少なくとも夜光虫ではなかったようだ。

ヨットに関しては、西欧以外では地元のセーラーは少なく、ヨットは西欧人の遊びで、日本もまだヨット後進国だと感じた。遊びは文化だ。文化は産業を産み、経済効果も期待できる。一方、ヨットは平和の象徴であると考えられる。戦争中の国ではヨットは走れない。世界中に普くヨット文化が普及し、多くの人々がセーリングを楽しむ時代(平和)が来ることを願ってやまない。詳細はブログ <http://harmonynew.exblog.jp/> をご覧ください。

28期の廣瀬祐二です。米に14年前に移り住み、現在ロサンゼルスにてビジネスコンサルタントとして日米企業の業務改革、業務統合等のプロジェクトに務めています。

世界で活躍する卒業生(コラム)

二人の子供を育てる父親の立場から米国社会で生きていくために必要な教育とは何なのかを常日頃考えています。人種の垣隔たる米国社会は国際社会の縮図です。そこでの教育は急速に進むグローバル化社会で生きていく上での参考になると思います。

多民族で構成される米国の学校教育で強調されるのが自発的行動力、そしてリーダーシップ能力です。開拓者精神の血が流れる米国人はとて主体的に人生を切り開いていきます。

一つの会社に就職してレールの上に乗った人生を送る人の割合は極めて少数派です。自己実現の為にフィールドを常に探し続ける変化を恐れないタイプでしたたかな国民です。

スポーツ、ボイスカウト等も盛んでその中で組織での役割、そしてリーダーシップを学んでいく仕組み

世界を人生の舞台に

ビジネスコンサルタント(米国ロサンゼルス在住)
廣瀬 祐二(28期)



からプレゼンテーションをする機会が多く用意され、小さな子供でも上手に自分の意見を論理的に相手に伝えるプレゼンテーションの旨さが重要視されます。そのスキルを磨くため、低学年から上手に作用して、自分達のルール、文化を上手に世界標準にしてしまおうとしたかき故であると考えています。そのような部分を日本は多いに学ぶべきではないでしょうか。

同時に情緒溢れる繊細で洗練された日本には、歴史の浅い米国には無い多くの素晴らしいものがあります。他人を思いやる心、自己犠牲の精神、秩序を守るモラルの高さ等、世界中が憧れるべき長所です。そのような日本、米国それぞれの良い点を兼ね備える事で和魂洋才と呼ぶべく素晴らしいバランス感覚のある人材が育つと思えます。

母校聖光学院には、全国レベルの優秀な人材が集まっており、そんな彼らが人生で最も吸収力のあるかけがえのない6年間を過ごす大事な場所です。在校生から世界レベルの視線で物事を考え、リーダーシップを身に付け卒業後は世界の一流校に進学して世界中から集まるエリート達と切磋琢磨するような進路が選択肢の一つとして考えられても良い時代であると思えます。

日本人としての誇りとアイデンティティを土台としながら国といたった小さな枠組みを出て、孤独を恐れず世界を舞台に人生を切り開く。グローバル化が不可避な現代、金の卵達の視野を広げ、人生の選択肢を増やす手助けをするのが教師の方々、そして親御さん達の裁量であり、責務ではないかと思えます。